

彙報

一九九八年一月より
一九九八年二月まで

班研究

唐宋美術の研究 班長 曾布川 寛

一九九五年四月から五ヶ年計畫で始まった本研究は、隋・唐・五代・北宋の美術全般についてより精確な理解を目指す。特に繁榮の極に達した盛唐美術を中心に、初唐からそこに至った過程、またそこから一轉して寫實的な山水・花鳥畫に代表される宋代美術を生むに至った背景などを探る。具體的な方法としては出土・傳世の文物、石窟寺院の佛教美術、畫論・書論の藝術論を三本の柱として、發表と會讀を交えて進めていく。本年の藝術論の會讀は劉道醇『五代名畫補遺』（河野道房擔當）、黃伯思『東觀餘論』（下野健兒擔當）を取り上げた。また肥田路美氏を招き發表していただいた。

- 一月一九日 東寺兜跋毘沙門天像について 岡田 健
- 二月 九日 響堂山石窟とその周邊 稻本 泰生
- 二月二三日 クメール佛教美術について 藤岡 穰
- 三月 九日 大畫面變相圖の成立をめぐる

て

四月二七日 漢中・安康地區の陶俑 肥田 路美

小林 仁

五月二一日 インド後期佛教石窟と三つの 王朝 定金 計次

六月 八日 青銅器の塗漆について 中野 徹

七月 六日 訪中歸國報告―歴史博物館所 藏の書について― 大野 修作

九月二八日 天龍山石窟の唐代造像 西林 孝浩

一〇月一九日 中國北朝時代の星宿圖 林 聖智

十一月 二日 唐代の古體文字をめぐる 木島 史雄

十一月三〇日 宋代青綠山水研究―(傳)趙伯 驪萬松金闕圖卷の主題と表現 について 竹浪 遠

十二月二四日 日本古代の金銅佛をめぐる 磯波 恵昭

譯經僧傳研究 班長 桑山 正進

譯經僧とは、インドや中央アジアから中國に やってきて、經典漢譯に參劃した佛教僧である。

かれらに關する情報は『高僧傳』『續高僧傳』『宋高僧傳』などに編纂されている。これらの傳記を班員の専門分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視點をもつて讀解檢討し、四世紀―八世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とする。あわせて據るべき現代語譯を作成する。研究會は一九九六年四月から二〇〇一年三月まで隔週の月曜日(二時―五時)に文獻センター會議室で開催。

中國音韻史の研究 班長 高田 時雄

本研究班は一般の書目には著録されることの稀な明清の韻學關係の書物を取り上げ、序跋や凡例を讀みつつ、その資料的性格を闡明し、明清の音韻史を辿ろうとするものである。一九九八年三月で終了、研究成果として論文集『中國近世の音韻學』を編集。

十六・十七世紀アジアにおける言語接觸 班長 高田 時雄

本研究班ではポルトガル勢力のアジア東漸を契機として起こった言語接觸の諸相を、ジェズイットを初めとするカトリック諸會派の資料を中心として解明することを目指す。また研究報告と並行して一九九三年マニラ版タガログ語ドナルナの會讀を行いつつある。前者については以下の報告を得た。

五月二一日 基本文獻解説 高田 時雄

八行四段動詞アウの發音 岸本 惠實

五月二五日 キリシタンの聖書

米井 力也

パレト寫本のローマ字表記から日本語の音聲の實態にどこまで迫れるか？ 鈴木 廣光

六月 八日

ヨーロッパに傳わった最古の漢字標本 高田 時雄

六月二二日

ムガル朝名稱考 ポルトガル語史料から 眞下 裕之

宣教師の記述したチベットの言語—研究序説と展望— 池田 巧

ヨーロッパ人が見た日本語 ヨーロッパ人が見た日本語 エンゲルベルト・ヨリッセン

一〇月二二日

日本語のドチリナ諸本とその研究概況 岸本 惠實

ポルトガル訪書記

米井 力也

一〇月二六日

十六世紀イタリアにおける宗教教育をめぐって

エンゲルベルト・ヨリッセン

マカオにおける言語接觸 高田 時雄

二月 七日

『南詞雜解』について 鈴木 廣光

タガログ語版ドチリナについて ジェニー・メンドーサ

班長 田中 淡

中國技術の傳統

「中國技術史の研究」に引き續いて、一九九六

年から五年間の計劃で、中國技術の傳統と特質について検討を加えてゆく。基本的には生活科學技術を中心とするが、しかし前研究班の過程で雕けながらみえてきた中國技術史における研究課題は、特定の時代、分野に偏重しない。一般的には、技術と科學の相關、技術者と社會、生活科學の特質、少數民族の技術、等々の主題に關わるであらうし、個別的には、農業、醫學、土木建築、紡績、數學、天文學、化學、その他の領域に擴がるであろう。會讀のテキストとしては、引き續いて元・王禎の『農書』農器圖譜の譯注作成をすすめてゆく。並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究發表を隨時おこなう。

標記の期間に、王禎『農書』農器圖譜・蠶繅門の譯注を白杉悦雄、森村謙一、小林博行、福田美穂が擔當した。また左の研究發表がおこなわれた。

二月二四日 馬の儀禮と養蠶儀禮 小南 一郎

三月一〇日 江戸天文方の活動とその思想的背景—澁川春海・谷秦山往復書簡をめぐって— 川和田晶子

四月二日 梁の沈約と郊居 外村 中

五月二日 北魏洛陽の庭園 村上 嘉實

五月二六日 中國醫學書における症候分類について—「短氣」徵候とその診斷學的意義をめぐって— 東郷 俊宏

六月三日 朝鮮の觀賞園藝學の形成における中國の影響 李 樹華

一〇月二七日 コスモスとしての日本農書—作りまわしから天のまわしへ— 徳永 光俊

十一月一〇日 『山林經濟』の増補とその農學思想 李 鎬澈

二月 八日 『海島算經』論攷 杜 石然

中國の禮制と禮學 班長 小南 一郎

當研究班では、周禮春官部分を買公彦疏で讀み、本文と鄭玄注を翻譯し注釋を作る仕事を進めて來たが、本年度中に春官部分を讀み終わった。引き續き、續漢書の禮儀志を讀み、譯注を付けている。正史の禮儀志に記される儀禮が、國家や天子の存在意義とどのように結びついていたのか、具體的な儀禮の細節の復元作業と關連させつつ、考えようと努めている。

本讀みと並行して、班員による、次のような發表が行われた。

一月二七日 經典解釋の二つの流れ—董簋の考古學と訓詁學— 木島 史雄

二月一七日 東周楚國墓葬と禮制度 高 崇文

六月 二日 六朝碑傳文小考 原田 直枝

六月二三日 王弼老子、論語、易注の禮に關わる章の解釋について 仲畑 信

九月二日 中唐における禮 愛甲 弘志

九月二日 漢代の祭祀 村田 浩

一〇月二七日 尹灣漢墓簡牘に見える文學卒史について 西川 利文

十一月二四日 江戸時代の女性禮法 相川佳子

十二月 一日 禮經通論と新學偽經考 末岡 宏

唐代宗教の研究 班長 吉川 忠夫

『北山録』の會讀は七月をもって卷六「議異說」まで讀み進んだところでいったん中斷し、九月以降、下記の研究發表を行った。

九月一六日 唐代律文獻に見える梁僧祐『薩婆多師資傳』 船山 徹

九月三〇日 賈大隱の『老子述義』 古勝 隆一

『北山録』の立場と「南宗禪」以前の南宗禪をめぐる 荒牧 典俊

一〇月一四日 唐代における三階教徒―石刻史料を手掛かりとして― 愛宕 元

一〇月二八日 『太上老君說常清靜經』をめぐる二三の問題―唐杜光庭注を中心に― 麥谷 邦夫

十一月二日 敦煌『劉家太子傳』と寶頭盧・彌勒信仰 金 文京

唐代巴蜀における佛教と道教 吉川 忠夫

十一月二五日 白履忠(渠丘子)の『黃庭經』

二月 九日 十一王經と死者の祭祀 垣内 智之

周氏冥通記研究 班長 麥谷 邦夫

本研究室は、吉川忠夫教授を班長とする「六朝道教の研究」研究班による『眞誥』譯注作業の終了を受け、同じく梁陶弘景の編纂になる『周氏冥通記』四卷の譯注作成を主目的として、一九九八年度より二年間の豫定で活動を開始した。本書の譯注作成作業を通じて、六朝時期の茅山における上清派道教の動きやその思想信仰の特質がより明かになることが期待される。本年度は第一巻を讀了した。

文獻と情報 班長 勝村 哲也

研究方法と状況は昨年と變りがない。ただ書庫の改修工事が終了したので、文獻研究を再開できるようにになった。建仁寺兩足院の調査は尾崎、牧野が擔當しほぼ收束した。琉球の調査と併せて、一部の畫像のCD-ROM版による公開を豫定している。對馬は勝村が繼續して調査を進めている。情報班は、十一月一四、一五兩日、カリフォルニア大學バークレイ校よりルイス・ランカスター教授とハウエイ・ラン氏、臺灣、中央研究院より謝清俊、國立政治大學より謝瀛春の兩教授、韓國より、ソウル大學の宋基中、民族大學の金興圭、東國大學のリー・ヨンクウ教授の参加を得、東洋大學チャールス・ミュラー教授を座長として研究會をもった。ここでは漢字文獻の國際的利用、情報の収集及びトランスミッションに關連す

る問題等について協議した。丹羽、桶谷等が報告した。文獻班における研究報告は次の通りである。

二月一三日 ロシアの漢學とロシア所藏の中國古籍 B・リフチン

五月二日 積砂藏經について 李 際寧

六月 五日 從近年新發現的出土文獻重新認識中國思想史 葛 兆光

六月一九日 近代中國における書物の傳播 金 文京

七月 三日 近世日本における醫書と文學 福田 安典

一〇月 九日 元朝の科學資料について 森田 憲司

一〇月二三日 國書紙背書入れ『文集』について―『管見記』と『秘府略』を繞って 神鷹 徳治

十一月 六日 賈大隱『老子述義』の佚文 古勝 隆一

十二月二〇日 中國における最近の元史研究 陳 高華

十二月一日 李商隱研究紹介 董 乃斌

邊境出土木簡の研究 班長 冨谷 至

三年計劃の第三年次に當たる今年度は、昨年度に引き續き『敦煌漢簡』の會讀を行うと同時に、會讀の成果を踏まえた班員各位の研究發表を行い、相互に批判・検討する中で簡牘資料に對する文學學的・歴史學的な理解を深めあった。また二

月二〇日には中央大學の池田雄一教授をお招きし、「木竹簡・帛書を利用した小文をめぐって」と題する講演を伺った。
 なお、班員各位による研究発表の題目は下記のとおりである。

五月 八日 敦煌馬圈灣出土「雲中郡雲中城下里王純」坐名籍をめぐって 鷹取 祐司

六月 五日 漢代敦煌戦線の展開と穀物管理 宮宅 潔

七月一〇日 節氣による曆譜の復元 吉村 昌之

一〇月 九日 『曆事明原』について 大川 俊隆

十一月二三日 邊境出土簡牘研究の方法論的省察—馬圈灣出土簡牘の性格を考えるにあたって— 藤田 高夫

十二月 四日 馬圈灣遺址の性格をめぐって—特に廩致を中心に— 佐藤 達郎

中國共產主義と日本—思想・運動・戦争— 班長 狹間 直樹

現在の中國が中國共產黨の支配する「共產主義」の國家としての中華人民共和國であることは、明白な事實である。中國近代史の一つの歸結としてこの中華人民共和國の誕生にいたる經過を振り返るには、二十世紀において獨特の歴史現象として出現した世界の共產主義との關連でと

らえねばならぬことは言うまでもないとして、そのさい東アジアにおける日本（朝鮮を含め）との密接なかわり探求がとりわけ必要とされるのである。本研究は、中國共產主義のありようを日本との關連において、思想・運動・戦争の諸側面から迫ろうとするものである。

一月二三日 戦後東北接收をめぐる「局地的冷戦」化への傾斜 その一

「熊式輝日記」からみた一九四五年國民政府東北接收の挫折 西村 茂雄

二月 六日 中國ナショナリズムと日本の工業化 森 時彦

二月一〇日 中國共產黨における朝鮮人黨員 水野 直樹

四月一七日 田中義一—蔣介石會談について 狹間 直樹

五月 一日 毛澤東における新聞と壁報 高嶋 航

五月二九日 國共合作の終焉とコミンテルン第八回執行委員會總會—その中國代表「チュグーノフ」を中心に 石川 禎浩

六月二二日 中國共產黨在革命時期三次左傾錯誤的比較研究 金 冲及

六月二六日 日本から見た中國近代教育 中島 勝住

一〇月 二日 一九四五年「歴史決議」の成立

過程 緒形 康

一〇月一六日 汪精衛南京政府の清郷工作 柴田 哲雄

一〇月三〇日 中國共產黨と日本帝國主義—三〇年代滿洲省の活動を中心に 江田 憲治

十一月三日 虚無黨小説の展開 山田 敬三

十一月二七日 戴季陶の日本觀について 久保 純太郎

十二月一日 淪陷期上海の文藝活動 濱田 麻矢

なお、六月二二日の午前に、中國社會科學院近代史研究所研究員唐寶林先生の「陳獨秀在中國近代史上的作用と地位」報告討論會をもった。

中國近代の都市と農村 班長 森 時彦

都市と農村の關係を主軸にロングスパンで中國近代史を縱斷的にとらえなおし、前近代から現代にかけての中國の社會變動を巨視的に分析する視座の形成を目指して一九九三年にスタートした本研究班は、本年三月をもって終了した。この五年の間に行われた報告は七〇以上の多くを數える。今年度は報告論文集に掲載豫定の論文草稿を班員全員で詳細に検討することにほとんどの時間を費した。そのエッセンスは十五篇ほどの論文集として公刊の豫定である。

一月一六日 近代廣東東部地區キリスト教史 蒲 豐彦

一月三〇日 貴州省安順地區における農村

文化と都市 金 文京

二月一三日 近代江南における在來綿業

二月二七日 請け負い制度からみた官府と

納税戸 岩井 茂樹

中國近代化の動態構造 班長 森 時彦

近代における中國文明と西洋文明の接觸が中國の社會構造にいかなる變動をもたらしたかという問題を、政治・經濟・文化などさまざまな専門分野から多角的に考察することが、このプロジェクトの課題である。その際、従来はともすれば西洋近代が中國の傳統社會にあたえた衝撃を一方方向的に分析する傾向が多くみられたが、この共同研究ではむしろ中國在來の社會構造が西洋文明の受容にあたってどのように規定要因として作用したか、そしてそれが中國の近代化においていかに機能したかという側面にも注意をはらいながら雙方向の分析をすすめる。現在の見通しでは、一九二〇年代をさむ時期の長江デルタと珠江デルタに問題の核心があるように思われる。

四月二四日 研究課題をめぐるとの構想

森 時彦

魚鱗冊をめぐる虚構と現實 高嶋 航

五月 八日 中國共產黨の農民運動政策と

コミンテルン 石川 禎浩

五月二二日 中國近代における鄉村思想の

展開 森 紀子

六月 五日 集團化前華北農民の生活空間

六月一九日 都市型特務(C・C系)の動向

と歴史的位置 菊地 一隆

七月 三日 一九四四年大後方人心理的巨變

金 冲及

九月二五日 機械製洋式貨物の釐金免除と

その對象製品の擴大 林原 文字

一〇月 九日 珠江デルタの農村社會と市鎮

片山 剛

一〇月三三日 一九三〇年代から四〇年代初

頭の東南アジア華僑通商網と

日本 籠谷 直人

一月 六日 村民自治と轉換期における中

國國家・農民關係の再編 張 玉林

一月二〇日 從官商到吏士——一九世紀天寶

行的演變 黃 啓臣

民國初期の家庭像の模索 西川 眞子

二月 四日 近代中國の學校生活 中島 勝住

北朝後半期佛教思想史研究 班長 荒牧 典俊

五年の計畫でスタートした本研究班は、一九九

九年三月を以て終了する。北朝後半期佛教思想史の實物資料である敦煌寫本を解讀し校定し、それらを中心にして、いままでほとんど解明されていなかった、この時期の佛教思想史の根幹の動きを解明し、以て隋唐の禪思想史の起源・展開へと

つなげていく、という當初の目的は、かろうじて

達成したのではないかと考える。しかし反省す

べき點も、多い。敦煌寫本を解讀し校定するとい

う仕事は、意外に大変で、それだけに時間をとら

れ、それらに文獻學的・思想史的な注釋を加える

ことができなかった(寫本校定の仕事を、あらか

じめずませておいて、共同研究をはじめた方がよ

かった)。この時期の佛教思想史の根幹の動きが

解明されていないからこそ、本研究班を構想した

のであるが、そしてかろうじて解明し得たのでは

ないかと考えるが、そのような佛教思想史の根

幹の動きをふまえて、儒教、道教、美術史、華

嚴・天臺・禪思想などを御専門の班員の方々と、

共同研究するという「共同」の實には及び難かつ

た(あらかじめ佛教思想史の根幹の動きを解明し

ておいて、それを共有財産として出發した方がよ

かった)等々。しかし、ともかく多様な専門の班

員十五名の方々に執筆していただいで成果報告

書『北朝中國佛教思想史』を刊行すべく、文部省

の「研究成果公開促進費」を申請し、一九九九年

度内には出版する豫定である。

最終年度である本年度は、成果報告書に執筆豫

定論文の豫備發表を中心に共同研究会を運営し

た。

一月三日 地論宗と南朝教學・教判と行

位について 船山 徹

東魏北齊の石窟寺院 稻本 泰生

二月 六日 「隨緣」の思想 石井 公成

五月五日 地論宗の緣起説 青木 隆

善導における眞如・法性 宮井 里佳

五月二十九日 舌柱上齋 横手 裕

天臺智顛と地論教學 木村 宣彰

六月二日 謝靈運と維摩經—猛顛との確執對立の背景 鶴飼 光昌

唐代老子注釋學と佛教 麥谷 邦夫

六月二十六日 法性圓融宗の成立について 上山 大峻

六朝末隋唐初の儒林と佛教 吉川 忠夫

一〇月 二日 成實論における有部批判の論點 宮下 晴輝

成實論と大衆部系學説 福田 琢

なお、以後の研究會は、一〇月一六日より一月二六日に至るまで六回にわたって、荒牧が「北朝乃至隋唐佛教思想史序説」の豫備發表をかねて報告し、それを中心に共同研究を總括することを試みた。一九九九年二月五日以後の研究會は、客員研究員として來日いただいたハンブルク大學 Lambert Schmithausen 教授を中心に「楞伽經」の選讀會にあつては豫定である。

日・中・朝間の相互認識と誤解の表象 班長 J・フォーゲル

山室 信一

日本・中國・朝鮮の三國間には隣接した政治社會として相互の位置づけをめぐって認識上のギャップが存在し、それが時に政治的對立そのものの要因とさえなってきた。もちろん、その背景には様々な事情があり、これを解消することは容易ではない。そうした認識ギャップや誤解が、いかに歴史的に形成され、いかに反復・傳承されてきたか、を洗い出し、その克服の方途を探ることは今日いっそう必要となつてきている。本研究では自民族中心主義そのものを前提としつつ、新たな民族間の相互認識をいかにして創出しようかという問題意識に立つて試行的議論を重ねてきた。しかしながら問題の性格上、研究班内での議論を、當該地域や異なつた地域に住む研究者の見解とつぎ合せてみるものが不可欠であることは研究會發足時から認識されており、國際シンポジウムの開催を前提とする試行的共同研究として運営された點に、この共同研究の特色があつた。その國際シンポジウムを、八ヶ國四〇名の研究者の参加を得て開催した。その後、シンポジウムにおける討議の取りまとめの作業を各セッションの司會者に進めてもらひ、討議集を京都大學人文科學研究所共同研究資料叢刊・第一號として刊行する準備を行なつた。

帝國の研究 班長 山本 有造

冷戰の終了、ソ連邦の崩壊とともに、諸民族・諸地域の間に遠心力が強まり、民族とは何か、國家とは何かがいま新たに問われはじめている。「民族自決に立脚した國民國家」という近代的理

念の妥當性が再検討されるなかで、「帝國」という國家統合のあり方についても、改めて科學的分析が要求されつつある。

われわれの共同研究會においては、これまでの「マルクス主義的經濟帝國主義」論にとられることなく、世界史のかつ長期的な比較の立場に立つて、「帝國」の原理と類型を整理・検討しようとする。

研究會は原則として隔週月曜日に開催し、平均二つの報告と討論を行つている。なお、とりあえずは二年間をもって研究會を終了し、研究報告を刊行する豫定である。

班長 横山 俊夫

自然や社會とのかかわりにおいて、言語が力を持つとは、どういふことか。おもに、日本や中國の話し言葉や書き言葉の事例をとりあげながら、この課題の検討を試み、總合研究の可能性を探つてみた。一年限りの豫備研究ながら、學内教育改善推進費によるセミナー「新發見事物への名づけをめぐる學内共同のこころみ」(事務局當研究所)とも連携をはかり、現代自然科學の専門語の流通力の狭さという問題にも視野をひろげた。

日本の植民地支配—朝鮮と臺灣—

班長 水野 直樹

日本の植民地支配の歴史に關しては、近年相當の研究が蓄積されている。しかしながら、植民地支配の全體像を明らかにするには、解明すべき問題が數多く残つてゐる。特に、同じ日本の支配を

受けていた朝鮮と臺灣とでは共通点とともに異なる点も多いが、具體的にはどのような違いがあり、それはなぜ生じたのか、について充分検討されてこなかった。本研究においては、植民地支配における朝鮮と臺灣との比較に重点を置くこととしている。また、植民地政策を日本の政治・経済・社会などとの関係でとらえることにも注意を拂うこととする。支配政策の決定・遂行の問題は、被支配側の諸要因を検討すべきことはいうまでもないが、支配の側の諸要因をも考慮に入れる必要がある。以上の趣旨から、本研究は日本史・朝鮮史・臺灣史の研究者の共同研究として進めることとする。毎回、研究報告とともに、資料紹介・書評・研究動向などを内容とする副報告を行なって、資料・研究状況についての共通の認識を深める形式をとる。

明治維新期の社会と情報

班長 佐々木 克

明治維新时期は、おおまかに幕末の舊體制崩壊期と、明治の新國家建設期とに二分できる。しかし何れにしても、變革期であり動亂期である。権力は動搖し、社会は流動化し人が激しく動き、そして噂・流言などさまざまな情報が飛びかう。そこで、権力も組織も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信してゆく。幕府や藩當局は、それぞれ独自の情報蒐集システムを持っていた。しかし傳統のシステムだけでは、新たな状況に對應出来なくなる。また幕府は政治や外交に關しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達

が、独自のネットワークをもって、情報の蒐集・発信主體として登場し、権力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基本的には、明治期に引き繼がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、権力が内包する根源的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に傳えなければならぬ情報を、如何に早くかつ廣く傳達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした状況のなかで、民衆自體も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような實態をふまえて、明治維新という變革期における「情報」にかかわる諸問題を、總合的に検討してみようと思圖しているものである。

アヴァンギャルド藝術の研究

班長 宇佐美 齊

一九九七年から二〇〇一年にいたる四年間の豫定で發足した共同研究班である。

二〇世紀初頭において藝術概念と表現理論とを大きく轉換させた、いわゆるアヴァンギャルド藝術を今日の視點から總合的に再検討することを主眼とする。その場合、文學・美術・音楽・演劇・映畫など諸ジャンル相互間の關わり、科學技術の進展、また政治や社会の變動が及ぼした影響、そして思想的なコンテクストなどに留意しなければならぬことはもちろんであるが、同時にこの運動においては世界的な並行現象ないしは波及効果が見られる點を充分に考慮して、西

ヨーロッパのみを視野に収めるのではなく、日本・中國・ロシア・アメリカ・その他の諸國との比較對照の視點をも重視しなければならぬだろう。なお時代區分としては、二〇世紀初頭から三〇年代までを取り扱う。研究会は原則として隔週に開催し、口頭發表と討議とを重ねたうえで、最終年度には論文執筆、報告書の刊行を豫定している。

主體・自己・情動構築の文化的特質

班長 田中 雅一

今年の研究會も最終年度にあたり、研究成果の出版に向けて會合を開いた。

植民地主義と人類學

班長 山路 勝彦

人類學とその周邊諸科學の發展は、西歐による非西歐地域への政治・經濟的進出と密接に結びついていた。しかし、それは單純に人類學が植民地支配の道具であった、ということの意味しているのではない。また日本と東アジアを中心とする、植民地支配も多くの複雑な問題を含んでいる。こうした問いかけに答えるために當研究會が組織された。二年目は一回に二名の報告という形で各自の問題意識を語ることで、情報と問題群の共有に努めた。

コミュニケーションの社会史

班長 前川 和也

一九九五年に發足したこの研究班は、工業化が本格的に進行する以前のヨーロッパ、東アジア、西アジアでの社会的コミュニケーションを議論してきた。文字記録、手紙や新聞、複製あるいは印刷といった情報メディアにかかわる問題、國家

あるいは帝國の内外をむすぶ情報ネットワーク、情報と公權力、「公共空間」などが討論の対象であった。一九九八年一月における二報告によって研究班は一應解散した。現在、報告書のための原稿を準備している。

空間と移動の社會史

班長 前川 和也

この研究班はヨーロッパ、東アジア、西アジアにおける前工業化諸社會でのヒトやモノの移動、情報あるいは制度の移轉、傳達、そしてそのような移動や傳達を可能にしたトポスを包括的に議論する。近代以前の歴史をあつかう研究者は、ともすれば、対象としている地域社會の自生的、自律的な諸側面を強調してきたけれども、この研究班では、社會境界をこえていった要素、また境界のなかへはいりこんできた力を、できうるかぎり強調したい。もっとも閉鎖的な社會でさえも、人々は外部世界についてのなんらかの認識をもっていた。その認識が、結局は社會の閉鎖性をつきくずす思想に結實していったのかもしれない。とりあえず初年度（一九九八年度）は、旅行記や地圖にみられる他者認識、空間認識、また廣域世界（たとえば帝國）におけるヒト、モノ、情報の移動、傳達のシステム、國民國家と人間の移住、移民などが論議された。

テクストの政治學—危機の時代における理論と批評

班長 上野 成利

二〇世紀の前半期は、近代的な人間諸科學の「危機」が表面化し、その克服をめぐる言説がさまざまな領域で浮上していった時代であった。こ

れらの言説には、近代みずから自己自身のありようを反省するという、近代の屈折した自己意識の構造が、きわめて先鋭的なかたちで表現されているといつてよいだろう。しかも、そうしたテクストの自己關係的な構造を押し破るようにして、「危機」の克服を可能にする方向が明示的に語られるとき、そこにはいやおうなくある種のねじれが生じ、場合によってはあからさまなイデオロギーとして機能することにもなる。こうしたテクストのねじれを解きほぐしながら、それらの言説に刻印された近代的な思考の回路を明らかにし、それが近代社會のありようとのどのように絡み合っているのかを検證すること—これが本研究班の基本的なねらいである。具體的には、哲學理論から社會理論、さらには文學・藝術批評にいたるまで、當時「危機」をめぐる日本と歐米で書かれたさまざまな領域のテクストが、われわれの考察の対象となる。初年度にあたる本年は、主として一九三〇年代に日本で書かれた批評に重點を置きながら、検討作業を進めている。

一七八九年人権宣言成立過程の研究

班長 富永 茂樹

この共同研究は「人間と市民の権利の宣言」の成立過程を詳細に辿りつつ、そこにあらわれる市民概念を検討することを目的としている。研究の対象となるテクストは、一七八九年七月から八月にかけての國民議會での議論、また議會の内外で發表された数多くの人権宣言草案である。昨年度から正式に發足したこの研究會は、發足前にす

に非公式なかたちで行われてきた讀書會での作業を繼續しており、さしあたり主な草案を選定し、その精確な翻譯を作成する作業にあたっている。作業の手順は、前もって班員の一名が下譯を作成し、研究會では別の一名がそれを批判的に検討して、班員全員で最終的な譯文を決定するというものである。當初の豫定にさらに翻譯すべきテクストを追加したが、そのぶんもふくめて現在のところ約四分の三の翻譯が完了している。

周邊—

班長 井狩 彌介

政治權力と宗教權威との關係は、世界の各文明地域においてそれぞれ独自の様相をもって展開し、その文明の基本性格と密接に結びついている。古代インドにおいてこの問題は、權力の中心に立つ王と、正統な宗教儀禮傳承を獨占するプラーマン知識階級との關係に典型的に現われる。本研究では、本來は獨立した文獻群として發生した「法典」と「王權政略論」が次第に相互影響を及ぼしつつ歴史的に交差して行く過程を焦點に据える新たな視角から、インド學各分野の専門研究者の協力のもとに、權力と權威との關係構造とその歴史的展開の考察をはかる。敘事詩『マハーバーラタ』の「ラージャダルマ（王法）」章（XII—128）に焦點をあて、隔週に行われる研究會ではテクストの會讀形式を中心として研究が進められてきた。本年度において主要部分の検討を終え、敘事詩にあらわれる王權の諸側面についての研究班で扱った資料のまとめと研究報告論文集

の作成をおこなう豫定である。
近代社會における研究者の組織化—研究所・學會・學派—
班長 阪上 孝

専門的な國際學會や研究所の設立は一九世紀後半に特徴的な現象である。このような研究者の組織化を促した社會的な條件は、國家と科學の緊密な結びつき、「科學國家」ともいへべき國家のあり方が支配的になつたことにある。科學に内在する條件については、一つは學問の専門分化が學際的な研究の總合の必要を呼び起こしたこと、もう一つは大量的な觀察、調査、比較などが科學研究の中心的な技法になつたことであらう。いわば、「知識の社會化」と並行するかたちで「科學國家」化（社會の科學化）が進行していつたのである。このように科學と社會とが交差する場面を、研究所や學會についての具體的な研究をつうじて説明していくこと、ここに本研究班のねらいがある。四年間にわたつて行なつてきた本研究班も最終年度を終え、現在、報告書の刊行をめざして班員各自が論文執筆を進めている。

進化論を読む
班長 阪上 孝
ダーウィン『種の起源』の刊行以來、〈進化論〉は人文・社會科學の領域にまで大きな影響を与え、近代科學全般にパラダイム・シフトをもたらした。その影響の大きさは、「生存闘争」や「適者生存」といった用語の普及のうちに端的に見て取れるだろうが、しかし進化論的な思考様式は、そうした表層的な次元だけでなく、一九世紀後半以降の社會と學問の枠組みに深く根を下ろしてい

るといふべきだろう。〈進化論〉がさまざまな社會と學問分野でどのように理解され、受容され、批判されていつたのかを比較検討することで、現代の知識と社會のありかたは、その問題性もふくめて明らかになるにちがいない。こうして本研究班では、「進化論と社會」を主題とする本格的な共同研究の準備段階として、まずは「進化論を読む」ことに重點をおくことにした。現在、基本的なテキストを読み進めながら、〈進化論〉の問題構制をめぐつて討議を重ねている。

個人研究

- 東方部
 - 六朝隋唐精神史 吉川 忠夫
 - 中國近代社會思想研究 狹間 直樹
 - 南アジア大陸北西地方の歴史考古學研究 桑山 正進
 - 中國古代の傳承文化研究 小南 一郎
 - 原始佛教起源論 荒牧 典俊
 - 中國美術の様式と意味 曾布川 寛
 - 中國建築の様式・技術・空間 田中 淡
 - 近代中國の綿紡織業 森 時彦
 - 道教思想研究 麥谷 邦夫
 - 敦煌寫本の言語史的研究 高田 時雄
 - 新漢字コード系の構築 勝村 哲也
 - 中國古代中世の法制 富谷 至
 - 先秦時代の金文 淺原 達郎
 - 中國の小説、演劇及び講唱文學の演變

- 清代の文化と社會 金 文京
- 古代中國の考古學研究 井波 陵一
- 中國科學の基礎理論 岡村 秀典
- 近世中國の財政と社會 武田 時昌
- インド・中國における唯識佛教の基盤と背景 岩井 茂樹
- 明清時代の官僚制度 船山 徹
- 中國中世學術史の研究 谷井 陽子
- 中國小學史 木島 史雄
- 中國佛教美術の研究 森賀 一恵
- 前近代朝鮮の政治制度と社會制度 稻本 泰生
- 海派小説研究 矢木 毅
- ムガル朝時代の歴史敘述の研究 濱田 麻矢
- 中國近代の社會・文化構造 眞下 裕之
- 中國隋唐期における疾病認識—「諸病原候論」を軸に— 高嶋 航
- 魏晉南北朝時代の注釋學 東郷 俊宏
- 日本部 古勝 隆一
- 一九世紀における明治維新 佐々木 克
- 「日本植民地帝國」の經濟史的研究 山本 有造
- 前近代日本の文明史的研究 横山 俊夫
- 近代東アジアにおける日本の法と政治 山室 信一
- 近代朝鮮の政治と社會 水野 直樹
- 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク 水野 直樹
- 近代天皇制の文化史的研究 籠谷 直人
- 士族の研究 高木 博志
- 落合 弘樹

ドイツ國家學と近代日本
近代日本の言語政策
江戸時代天文曆學の文化史的研究
西洋部

知識と社會制度
シヌメル行政・經濟文書の研究
古代インド・ヴェータ祭式の構造と歴史的研究
開の研究

フランスの詩學
フランス革命と近代的主體の成立
南アジアの宗教と社會
文學理論の研究

後期ヴェータ文獻の成立史研究—ブラーフマ
ナからウパニシャッドへ—
初期近代ポーランドの政治文化
フランクフルト學派の政治思想

中世イタリアの「家」
共和國の法と道徳—フランス第三共和政期に
おける共和思想と新カント派—
ポール・ヴァレリーと二〇世紀フランスの思
想

南アジア・ムスリム社會の社會構造
小牧 幸代

東方部研究會
東方學報執筆豫備發表
一月二八日 孔子項託相問書 金 文京
庚戌の變(一五五〇)前後—北
邊における社會接觸と北虜問

二月 四日 題— 岩井 茂樹
楚辭天問篇の整理 小南 一郎

「經典釋文」の成立とその活用
—「書物の秩序化」の視點か
ら— 木島 史雄
汲冢書發見前後 吉川 忠夫

東方學報第七十册合評會

一月二八日 桑山論文 高嶋 航
矢木論文 岩井 茂樹
二月 二日 小南論文 眞下 裕之

事業概況

夏期公開講座—モノとしての書物

七月一〇日 古代メソポタミアの粘土板 前川 和也

古代中國の木簡—紙より優れた書寫材料— 富谷 至

『百萬塔陀羅尼』の語るところ 勝村 哲也

七月一日 中國古典籍のブックデザイン 木島 史雄

日用百科の使われかた—十九世紀の日本— 横山 俊夫

印刷文化と手稿(マニユスクリ)—ヴァレリー 森本 淳生
をめぐる—

開所六十九周年記念公開講演會

十一月五日 卜辭の法表現 森賀 一恵

軍事共同社會の文化人類學—宗教とジェン
ダー— 田中 雅一

徳川慶喜と戊辰戰爭 佐々木 克

一九九八年度漢籍擔當職員講習會(漢籍電算處
理)

第一日(九月二八日) 圖書館と情報システム(講演)

大型計算機センター教授 金澤 正憲
東洋學文獻類目の編纂とフォーマット(講義)
村田 康彦

東洋學文獻類目冊子體の作成(講義)
大型計算機センター技官 河野 典

業務分析と情報化(講義)
大型計算機センター技官 隈元 榮子

第二日(九月二九日) 漢字コード—外字の處理—(講義)
大型計算機センター技官 小澤 義明

電子漢字(e-hanji)(講義)
同志社女子大學非常勤講師 丹羽 正之

日・中・臺における漢字コードの規格(講義)
大型計算機センター助教 安岡 孝一

漢字コードの問題點とISO 10646 UCS(講義)
學術情報センター教授 宮澤 彰

データベース検索(一)(實習)

第三日(九月三〇日)

最近のデータベースの動向(講義)

大型計算機センター助手 川原 稔

情報ネットワークとインターネット(講義)

情報學研究所助教 岡部 壽男

データベース検索(一)(實習)

第四日(二〇月一日)

抄本(古文書)のデータベース化と畫像處理(講義)

大阪市立大學教授 柴山 守

古典データベースとその利用(講義)

統計數理研究所教授 村上 征勝

データベース検索(三)(實習)

第五日(一〇月二日)

大型計算機センターのネットワーク(講義)

大型計算機センター技官 櫻井 恒正

WWWによる情報サービス(講義)

大型計算機センター助教 澤田 篤史

質疑應答

金澤正憲 勝村哲也

一九九八年度漢籍擔當職員講習會(初級)

第一日(二一月九日)

漢籍の話(講演)

橘女子大學教授 小野 和子

四部分類—經・史・子・集(講義)

井波 陵一

實習(一)

第二日(二一月一〇日)

經部・小學書(講義)

東北大學教授 花登 正宏

カードの作り方(講義)

梶浦 晉

實習(二)

第三日(二一月二日)

史部書(講義)

淺原 達郎

實習(三)

第四日(二一月二日)

子部書(講義)

武田 時昌

實習(四)

第五日(二一月三日)

佛書(講義)

東山 新

質疑應答

所員動靜

。飛鳥井雅道教授(日本部)は、停年退官(三月三一日付) 京都大學名譽教授の稱號を授與(四月一日付)。

。横山俊夫助教(日本部)は、教授に昇任(四月一日付)。

。勝村哲也助教(附屬東洋學文獻センター)は、教授に昇任(四月一日付)。

。山路勝彦關西學院大學教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九九年三月三日)。

。高木博志北海道大學助教は、當研究所助教(日本部)に轉任(四月一日付)。

。東郷俊宏氏を助手(東方部)に採用(四月一日付)。

。小牧幸代氏を助手(西洋部)に採用(四月一日付)。

。古勝隆一氏を助手(東方部)に採用(四月一日付)。

。山室信一助教(日本部)は、教授に昇任(五月一日付)。

。塚本 明三重大學助教は、併任助教(比較文化研究部門、五月一日〜一九九九年三月三日)。

。船山 徹助手(東方部)は、九州大學文學部助教に昇任(一〇月一日付)。

。田中雅一助教(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、一九九七年二月二六日大阪發、マドラス大學に於いて巡禮資料の収集、ア

ンナマライ大學に於いて寺院祭の調査、ハワイ大學、ヒロ周邊に於いてハワイからインドへの巡禮者の調査を行い、一月二三日歸國。

。高嶋 航助手(東方部)は、一月九日大阪發、南京博物館、中國社會科學院歷史研究所に於いて文獻資料の収集を行い、一月二三日歸國。

。龍井一博助手(日本部)は、一九九七年三月二八日大阪發、ウィーン大學に於いてオーストリアにおける國家學思想の展開と日本への影響についての研究を行い、一月二八日歸國。

。高田時雄教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、二月一四日大阪發、北京大學に於いて古典學に關するレビューを受け、二月一八日歸國。

。藤井正人助教(西洋部)は、在外研究員旅費により、一月一〇日大阪發、ハーヴァード大學、ヘルシンキ大學に於いてヴェーダ・テキス

トの生成と轉移に關する先端研究の動向調査と研究協力、ユトレヒト大學圖書館に於いてカールント博士の資料とデータの點檢を行い、三月九日歸國。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、二月二六日大阪發、河南省文物考古研究所、焦作市文物考古工作隊、北京大學、中國國家文物局に於いて考古學的調査を行い、三月一四日歸國。

。富谷 至助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、三月二日大阪發、オランダ國立博物館、スウェーデン國立民族學博物館、大英博物館に於いて中央アジア出土考古文物の調査を行い、三月一五日歸國。

。木島史雄助手（東方部）は、三月九日成田發、フランス國立圖書館、大英圖書館、大英博物館、オックスフォード大學、ボドレイアン圖書館、ロンドン大學、デビットコレクションに於いて敦煌文書及び書物史研究のための西洋古典籍研究を行い、三月一五日歸國。

。井狩彌介教授（西洋部）は、三月一六日大阪發、ハーヴァード大學に於いて研究交流の打合せを行い、三月二五日歸國。

。高田時雄教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、三月一七日大阪發、ローマ國立圖書館、パレルモ市立圖書館、キヨソネ博物館に於いて漢籍調査を行い、三月三〇日歸國。

。麥谷邦夫教授（東方部）は、三月二五日大阪發、ライデン大學に於いて貝原益軒シンポジウム

及び資料収集を行い、四月一日歸國。

。荒牧典俊教授（東方部）は、二月九日大阪發、カリフォルニア大學バークレー校に於いて Numata Visiting Professor として研究及び講演を行い、五月一〇日歸國。

。森本淳生助手（西洋部）は、四月二二日大阪發、フランス學士院圖書館、フランス國立圖書館に於いてポール・ヴァレリーに關する研究及び資料収集を行い、五月一〇日歸國。

。田中 淡教授（東方部）は、五月五日大阪發、大明宮含元殿遺跡に於いて同遺跡保存整備に關する日中専門家會議に出席し、五月一〇日歸國。

。小南一郎教授（東方部）は、五月六日大阪發、西ミシガン州立大學に於いて第三三回中世學國際會議に参加し、五月一二日歸國。

。狹間直樹教授（東方部）は、五月一四日大阪發、香港中文大學に於いて戊戌維新運動史國際學術研討會に参加及び研究資料収集を行い、五月一八日歸國。

。勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、五月一五日日大阪發、中央研究院訊料研究所に於いて新漢字コード系の研究を行い、五月一九日歸國。

。麥谷邦夫教授（東方部）は、五月一八日大阪發、北京圖書館に於いて資料収集、北京飯店に於いて「宗教と科學による文化交流」シンポジウムに出席し、五月二四日歸國。

。富永茂樹助教授（西洋部）は、在外研究員旅費

により、五月二六日大阪發、パリ第八大學に於いてCOV & R年次大會に参加及び研究報告、フランス國立圖書館に於いて資料収集を行い、六月五日歸國。

。船山 徹助手（東方部）は、五月八日大阪發、ウィーン大學チベットの學佛教學研究所に於いてインド佛教哲學の研究を行い、六月九日歸國。

。森賀一惠助手（附屬東洋學文獻センター）は、一九九七年八月二六日大阪發、北京大學中文系に於いて古代中國語に關する研究を行い、七月一五日歸國。

。矢木 毅助手（東方部）は、二月一六日大阪發、慶北大學教師範大學に於いて朝鮮初期刑罰制度の研究を行い、八月一五日歸國。

。前川和也教授（西洋部）は、七月一三日大阪發、大英博物館に於いて館藏シュメール粘土板文書の研究を行い、八月一七日歸國。

。岩井茂樹助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、八月一〇日大阪發、上海圖書館に於いて資料調査、光明大酒店に於いて研究報告及び學術調査を行い、八月二日歸國。

。田中 淡教授（東方部）は、八月一六日大阪發、香山飯店に於いて第一回中國建築史國際研討會に参加し、八月二二日歸國。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科學研究費補助金により、七月三〇日大阪發、シंगाポール國立大學に於いてインド系移民の調査、ハワイ大學に於いてヒンドゥー僧院の調査、フ

リティッシュコロロンビア大學、トロント大學に於いてインド移民の調査を行い、八月二六日歸國。

。狹間直樹教授(東方部)は、八月一九日大阪發、北京大學に於いて戊戌維新一百周年國際學術討論會に参加及び研究資料収集を行い、八月二六日歸國。

。勝村哲也教授(附屬東洋學文獻センター)は、文部省科學研究費補助金により、九月四日大阪發、サンフランシスコ大學リッチー研究所に於いて新漢字コードのジョイント研究を行い、九月一日歸國。

。小山 哲助教授(西洋部)は、八月三〇日大阪發、ポーランド國立圖書館に於いて近世ポーランドにおける情報流通に關する史料調査を行い、九月一三日歸國。

。狹間直樹教授(東方部)は、九月八日大阪發、カリフォルニア大學サンタバーバラ校に於いて「梁啓超の研究」シンポジウムに出席、カリフォルニア大學パークレー校に於いて、資料収集を行い、九月一七日歸國。

。森 時彦教授(東方部)は、九月五日大阪發、カリフォルニア大學サンタバーバラ校に於いて「梁啓超の研究」シンポジウムに出席、カリフォルニア大學パークレー校に於いて、資料収集を行い、九月一八日歸國。

。水野直樹助教授(日本部)は、文部省科學研究費補助金により、九月一日成田發、ロシア現代史文書保管研究センターに於いてソ連共產

黨・コミンテルン朝鮮關係文書の調査を行い、九月二日歸國。

。金 文京助教授(東方部)は、九月一日大阪發、北京師範大學古籍研究所に於いて國際元代文化學術研討會に出席、北京圖書館に於いて資料収集を行い、九月二日歸國。

。宇佐美 齊教授(西洋部)は、九月一日大阪發、ボンビドゥー・ドゥーセ文學圖書館に於いてアヴァンギャルド藝術研究に關する調査及び資料収集、トゥールーズ・ル・ミライユ大學に於いて日佛比較近代詩研究に關する研究集會に参加し、九月三日歸國。

。高田京比子助手(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、九月八日大阪發、パドヴァ大學に於いて中世ヴェネツィア史についてレビューを受け、九月二三日歸國。

。岡村秀典助教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、九月三日大阪發、河南省文物考古研究所に於いて焦作府城遺跡の調査、北京大學に於いて調査打合せを行い、九月二六日歸國。

。富谷 至助教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、九月二三日大阪發、大英圖書館、スウェーデン國立民族學博物館、デンマーク國立博物館に於いて樓蘭ニヤ出土文書の調査及び研究打合せを行い、一〇月三日歸國。

。谷井陽子助手(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、一〇月一日大阪發、社會科學院歴史研究所に於いて明清時代檔案資料収集

を行い、一〇月二四日歸國。

。横山俊夫教授(日本部)は、學長裁量經費により、一〇月三〇日大阪發、オックスフォード大學、ケンブリッジ大學に於いて國際シンポジウム「人文學の新時代」準備會議に出席し、一一月九日歸國。

。岡村秀典助教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、一〇月二五日大阪發、焦作市文物考古工作隊、北京大學に於いて焦作市府城遺跡の發掘調査を行い、一一月一七日歸國。

。田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、一一月八日大阪發、トロント市内に於いて國際學術研究「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに關する研究」の調査を行い、一一月一八日歸國。

。籠谷直人助教授(日本部)は、一一月一五日日大阪發、臺灣中央研究院臺灣史研究所準備室に於いて第一一回太平洋國際科學會議で報告を行い、一一月一九日歸國。

。岡村秀典助教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、一一月二二日大阪發、香港中文大學に於いて南中國近隣地區古文化研究國際學術會議に出席し、畜産と動物犠牲の考古學研究のレビューを受け、一一月二五日歸國。

。高嶋 航助手(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、一二月八日大阪發、北京大學、河北省檔案館、上海圖書館に於いて清代の人口資料及び中國近代社會史關連の資料収集を行い、一二月二七日歸國。

。小南一郎教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、一月一九日大阪發、湖南省文物考古研究所、城頭山遺跡に於いて中國新石器時代の都城遺跡の調査を行い、二月二十七日歸國。

外國人研究員

。金 冲及

中共中央文獻研究室副主任
東アジア世界の轉折點——一九二七年の中國と日本——の研究(比較社會客員部門)

期間 一月一〇日〜七月一〇日
受入教官 森教授

。Fujitani Takashi

カリフォルニア大學サンディエゴ校歴史學部
準教授

太平洋戰爭における民族的マイノリティ出身
兵士の比較研究(日本學客員部門)

期間 六月一九日〜一九九九年一月一日
受入教官 水野助教授

。Pierre Bayard
パリ第八大學教授
文學と精神分析理論(比較社會客員部門)

期間 七月二〇日〜一九九九年一月二〇日
受入教官 大浦助教授

招聘外國人學者

。Klaus Kracht

ベルリン・フンボルト大學教授
日本の禮法ならびに年中行事に關する研究資料

料收集

受入教官 横山教授

期間 三月一〇日〜四月二一日

。金 慶南

釜山大學校韓國民族文化研究所研究助教
一九三〇—四〇年代における朝鮮の綿紡績工業化と勞働力再生産 受入教官 水野助教授

期間 四月一日〜一九九九年三月二日
受入教官 水野助教授

。Gerhard Leinss

チュービンゲン大學日本研究所專任講師
近代日本の曆と大雜書についての基礎研究

期間 四月六日〜七月三一日
受入教官 横山教授

。Kevin M. Doak

イリノイ大學歴史學部助教授
明治期における國民國家形成と市民社會の問題

期間 五月二一日〜八月一七日
受入教官 山室教授

。G. Aurora Testa

イタリア國立東方學研究所員
唐代洛陽城の考古學的研究

期間 九月二〇日〜一九九九年九月一九日
受入教官 桑山教授

。Francois Daniel Voegelé

ローザンヌ大學文學部 研究助手
ヴァードウーラ・シュラウタストラ第五章の研究

期間 一月一日〜一九九九年一〇月三一日
受入教官 井狩教授

。陳 金華

日本の初期天臺密敎の形成及びそれと中國佛敎の關係

受入教官 荒牧教授

期間 一月二八日〜一九九九年一月二七日

外國人研究生

。Martin Delhey

「瑜伽師地論」三摩酒多地の研究
受入教官 荒牧教授

期間 一月一日〜一九九九年九月三〇日
受入教官 荒牧教授

。Bogna Jankowska

日本文學(宮澤賢治に關する研究)
受入教官 小山助教授

期間 一月一日〜二〇〇〇年三月三一日

出版物

紀 要

人文學報 第八十一號(紀要第一三四册)

一九九八年三月三〇日刊

東方學報 第七十册(紀要第一三四册)

一九九八年三月二七日刊

ZINBUN(歐文紀要) 第三號

一九九八年三月刊

東洋學文獻類目 一九九五年度

附屬東洋學文獻センター編

一九九八年二月二七日刊

東洋學文獻類目 一九九五年度補遺版

附屬東洋學文獻センター編

一九九八年三月一三日刊

研究報告その他

中國技術史の研究

田中 淡編

一九九八年二月一〇日刊

調査報告 第三八號

日用百科型節用集の使われかた―地小口手

澤相の電算畫像處理による使用類型析出の

試み― 横山俊夫・小島三弘・杉田繁治

一九九八年五月三一日刊

共同研究資料叢刊 第一號

國際シンポジウム 日本・中國・朝鮮間の

相互認識と誤解の表象 討議集

山室 信一編

一九九八年二月二五日刊

平成九年度教育改善推進費(學長裁量經費) 研

究報告書 新發見事物への名づけをめぐる學

内共同のこころみ(代表 山本有造)

一九九八年三月三一日刊

所報人文 第四四號

一九九八年三月三一日刊